



# 筑紫女学園大学リポジト

## 「ハ」と「ガ」のカテゴリー分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA,Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1109">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1109</a>

# 「ハ」と「ガ」のカテゴリー分析

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Japanese Postpositional Particles  
“wa” and “ga”

Takafumi OGATA

筑紫女学園大学  
人間文化研究所年報

第32号  
2021年

ANNUAL REPORT  
of  
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE  
Chikushi Jogakuen University  
No. 32  
2021

# 「ハ」と「ガ」のカテゴリー分析

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to Japanese Postpositional Particles  
“wa” and “ga”

Takafumi OGATA

## 1. はじめに

本稿は助詞の「ハ」と「ガ」を、カテゴリー分析を用いて、両者の用法と違いを見ていく<sup>\*</sup>。カテゴリー分析とは、カテゴリーと成員の関係をイメージスキーマで表し、語や文などの意味を示すものになる。「ハ」と「ガ」では、少なくとも2つのカテゴリーが関与する。一つはカテゴリー( $\alpha$ )で、ハとガが付加する〈A〉が成員として所属する。ハでは、このAがカテゴリー( $\alpha$ )から外に取り出され、ガでは、カテゴリー( $\alpha$ )の中にとどまる。この違いが両者の違いの一つとなり、用法に影響を及ぼす。そしてもう一つのカテゴリー( $\beta$ )が、このAと連結して、意味が定まる。連結は、カテゴリーラベルまたは成員のどちらかと連結する。こうした関連づけを、カテゴリースキーマで表現していく。

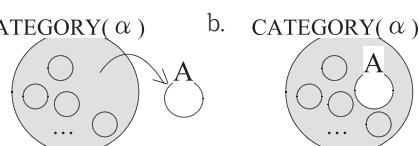
以下の構成では、2節でハとガの基本スキーマのあり方について見て、3節でハの用法を、4節でガの用法をスキーマを通して考察していく。

## 2. ハ、ガの基本スキーマ

ハとガは機能面から見ると、大きく異なる。ハは係助詞で、ガは格助詞になる。係助詞は様々な語につき、特別な意味を加えるとともに、文の終止にまで影響が及ぶ助詞になる。

格助詞は体言または体言に準ずるものに付き、文中での他の語との関係を示す。そのためハとガが付加するAとカテゴリー( $\alpha$ )の関係は異なる。ハは(1a)、ガは(1b)のスキーマになる。

(1a)ハでは付加するAが、カテゴリー( $\alpha$ )から外に取り出され、題目として取り上げられる。Aが主題となることで、カテゴリー( $\alpha$ )の他成員は背景化される(網掛けで表現)。そしてこのAが後続する別のカテゴリー( $\beta$ )のカテゴリーラベルまたは成員と連結することで、種々の用法が生じる。

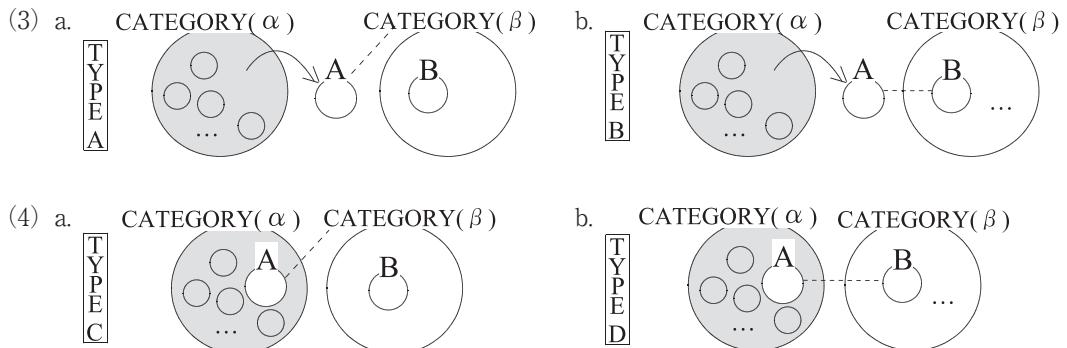


一方(1b)ガでは、Aはカテゴリー( $\alpha$ )の中にとどまり、他成員が背景化される。そしてAは後続するカテゴリー( $\beta$ )と連結し、格が定まる。連結方法により、用法がいくつか生じる。

このカテゴリー( $\alpha$ )は、ハとガでその性格が異なる。一般にハは旧情報に付き、ガは新情報に付くと言われる。しかし(2)のように、既知とされる総称名詞にガがつくこともある。

(2) 鯨が哺乳動物だということを知らない人がいるんだな、ときたま。(新里 1990: 41; 類例あり)  
そのためハとガの使い分けを、Aの新情報／旧情報を求めてしまうと、構文や談話レベルで説明できないことが生じる。ハではAが旧情報なのではなく、カテゴリー( $\alpha$ )が旧情報という制約が働いていると考えられる。野田(1996: 6)で、ハは「前の文脈にでてきたものや、それに関係のあるものを主題」とし、「前の文脈の話題を継続していく」ために使われるとする。そのため本稿では、Aではなくカテゴリー( $\alpha$ )が旧情報を担うとする。よって脈絡なく、Aが主題として取り出され、ハが付加することはない。一方ガでは、こうした制約がなく、新しい内容をもつてくことができるため、Aが新情報になれることとなる。

次にカテゴリー( $\beta$ )との連結を考える。連結とは、関連づけのことである。Aと連結するものは、2種類ある。一つはカテゴリー $\alpha$ ラベルで、もう一つは成員がある。ハは(3)のType A, B、ガは(4)のType C, Dで各々2種類ある。これらが基本スキーマになる。この連結を通常連結と呼ぶ(破線で表記)。Type AとType Cがカテゴリー $\alpha$ ラベルとの通常連結、Type BとType Dが成員との通常連結になる。基本、Aと通常連結されるものが言語化される。具体的にはAにガまたはハが付き、通常連結される成員またはカテゴリー $\alpha$ ラベルが表現される。



実際の用法では、さらに同一連結(同一物であることを示す連結)が加わったり、カテゴリーの種類や、カテゴリーと成員の関係に多様性がある。それに応じて用法が生じる。またカテゴリー( $\alpha$ )の背景化の度合いが変わることもある。とりわけ、ハでは対比、ガでは排他の用法のときに度合いが変化する。カテゴリー( $\alpha$ )の他成員の背景化の度合いを強くすることで、生じる意味もある。こうした要因を加えながら、ハとガの用法における意味を、カテゴリー $\alpha$ スキーマで以下示していく。

なおハとガが各々連続して現れる数だが、ハで主題として取り上げられるのは、基本1つまでだが、対比の意味が入るとこの限りではない。ハを連続して用いることができる。対比の意味で、並ぶ場合は、別個のものが順次取り上げられ、一つ一つでは主題は一つとなっている。一方ガの場合でも、排他の意味で連続することができるし、表す格が異なれば、連続することができる。用法の種類に応じて、連続する数が異なる。

- (5) a. 私はケーキは食べません。 b. 彼はあなたは好きです。 <どちらも対比の解釈>  
(6) a. 動物では、象が鼻が長い。 b. 彼が、昆虫が好きです。

### 3. ハのイメージスキーマと用法

ここではハを考察し、用法に応じたカテゴリースキーマを提示していく。まずAに後続するものを3つに分類する。一つめは名詞が後続する場合、二つめは形容詞・形容動詞が後続する場合、三つめは動詞表現が後続する場合である。分類に応じて用法や意味を示していく。そして対比の用法、疑問詞とその値、「○は○が…」の構文、複文におけるハについて考察する。

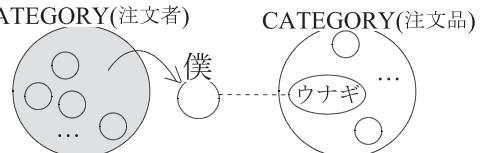
論じるにあたり確認したいことは、前節で述べたように、カテゴリーアルには制約がかかる。カテゴリーアルは既知の情報、つまり旧情報でなければならない。新たに設定したカテゴリーアルから、Aを取り出すことはできない。ガにはこうした制約がない。以下、個々の用法を見ていく。

#### 3.1 連結するもの(ハ)

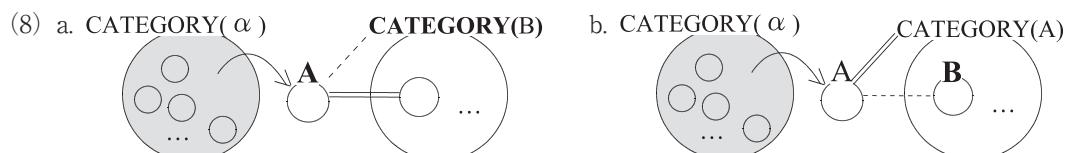
##### 3.1.1 名詞との連結(ハ)

Aに名詞が後続するものを見ていく。基本スキーマは(3)のType AとType Bになる。Aが、成員と通常連結するか、カテゴリーラベルと通常連結する。しかし(3)そのもののスキーマを持つ文は、まれである。なぜならカテゴリーアルから取り出したAが、Aと全く関係の無いカテゴリーや成員と関連づけられることがあまりないからである。

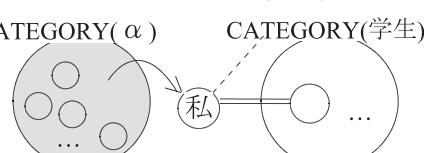
それでも(3a)の例として、うなぎ文が (7) CATEGORY(注文者) ある。例えば、食堂で注文するときに「僕 ウナギだ」といったとする。スキーマは (7)になる。カテゴリーアル(注文者)から、〈僕〉が取り出され主題となり、カテゴリーアル(注文品)の成員〈ウナギ〉と通常連結される。カテゴリーアルの種類が異なれば、いろいろな意味になる。例えば、子供劇の役について、述べる場合、カテゴリーアル(α)は演者、カテゴリーアル(β)は役名になる。このとき、僕の役名はウナギだの意味になる。



とはいって一般的には、Aは2つの連結を持つ。一つは(3)で見た関連づけのための通常連結(破線で示す)で、もう一つは同一連結がある(二重線で示す)。同一連結とは、結びつく2つが同一物であることを示す。通常連結と同一連結は、同じものと連結しない。別々のものと結びつく。基本は片方が成員と連結すれば、もう片方はカテゴリーラベルと連結する。このとき(3)のType AとType Bに対応する(8a)(8b)の2種類がある。通常連結に加え、同一連結が追加されている。



(8a)はAが、ラベルBと通常連結し、成員と同一連結する。代表的な用法に、[所属]がある。例えば「私は学生です」のスキーマは、(9)になる。(9)では「私」がカテゴリーアル(学生)と通常連結する。そしてカテゴリーアル(学生)の成員と同一連結する(二重線で表記)。同一連結することで、A(私)はカテゴリーアル(学生)に所属し、学生になる。通常連結のA(私)とカテゴリーラベル(学生)が、言語化される。



一方(8b)ではAは、カテゴリーラベルと同一連結するので、カテゴリーアル(β)はカテゴリーアル(A)

となる。同時に、Aとその成員Bが通常連結する。用法として、[典型例]がある(例は(10))。

- (10)a. 花は桜木、人は武士。 b. 魚は鯛だ。 c. 桜は吉野だ。

- d. 冬は鍋だ。 e. 時計はロレックスだ。

カテゴリー(A)は、Aに関連するものという緩やかなカテゴリーになっている。そしてその成員の中で、典型的な成員が、Aと通常連結し、言語化される。例えば(10b)「魚は鯛だ」のスキーマは(11)になる。そこではカテゴリー(魚)の中の典型的な成員〈鯛〉が前景化される。前景化された[鯛]と[魚]が通常連結で結ばれ、両者が言語化される。

同様に(8b)のスキーマを持つものに、トートロジーがある。ただ(11)と異なり、言語化されるものが違う。トートロジーは、同語反復して得られる修辞表現で、一見冗語表現に見られるが、そうではない。意味は大きく2つある。一つめは、A本来の特性を強調する意味になる。例えば、棋士藤井聰太が、劣勢で苦境に陥ったけれども、劇的な逆転勝利をしたとする。このときトートロジー「聰太は聰太だ」と言ったとする。スキーマは(12)になる。ここではA[聰太]が、カテゴリー(聰太)と同一連結し、カテゴリー(聰太)となる。その中の成員で典型的成員B(勝負強い)と、Aが通常連結する。よってスキーマの構造は(11)と同じになる。

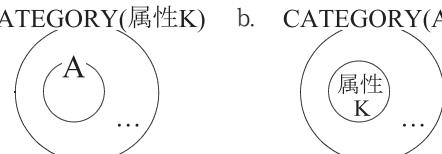
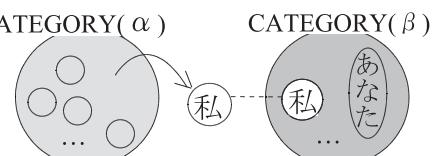
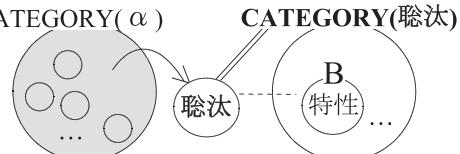
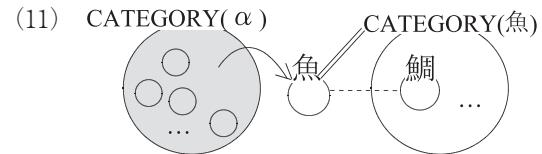
(11)のように、通常連結したものが言語化されれば「聰太は勝負強い」と表現される。しかしトートロジーでは、Aと同一連結されたカテゴリー(聰太)の方が、言語化される(太字で表記)。この2つは同一連結されたもので、言語表現としては同じなので、同語反復となり、トートロジーとしての表現になる。

しかしトートロジーには、もう一つの意味がある。〈他でなくそれ自身〉という、他者を強く背景化する解釈である。例えば「私は私、あなたはあなた」で、「私は私」は(13)のスキーマになる。(13)ではA(私)が、カテゴリー(β)の成員〈私〉と通常連結する。一見、同じものが結びつけられているので、同一連結に見えるがそうではない。カテゴリー(α)から取り出した[私]と違い、カテゴリー(β)の〈私〉は、カテゴリー内で他成員を強く背景化することで、他の者でない[私]と特徴付けられている。そのため主観的には、別物である。別物ゆえに、通常連結となり、言語化される。

ハは、後続する名詞と=で単純に結びつけるわけではない。上記で示したような、Aが連結するのは、ラベルの場合と、成員の場合があり、言語化されるものにも変化がある。

### 3.1.2 形容詞・形容動詞との連結(ハ)

次に形容詞・形容動詞が後続するものを見る。これらはAの属性や性質を表し、一時的なものと恒常的なものがある。一時的なもの(14a)のスキーマになる。属性カテゴリーの中に、個体成員Aがある。固有な属性でないため、個体Aが一時的に



属性カテゴリーの成員になっている。そのため個体 A は、いつでもその属性カテゴリーから外れる可能性がある。一方恒常的なものは、(14b)になる。個体 A 自体が、カテゴリーになる。このカテゴリー(A)の中に、成員として属性が存在する。よって属性は、個体 A にとって固有のものとなり、恒常的属性となる。

このときハ構文は、一時的属性と恒常的属性を表す 2 つのスキーマ(15)を持つ。一時的属性(15a)では、後続するカテゴリー( $\beta$ )が(14a)の構造を持つ。属性カテゴリーの中に個体成員(A)がある。カテゴリー( $\alpha$ )から取り出した A は、カテゴリー( $\beta$ )の個体成員と同一連結(二重線)されるので、A は一時的に属性(B)を持つ。同時に A と、カテゴリー $\beta$ ラベル(属性)が通常連結(破線)される。通常連結の A とカテゴリー $\beta$ ラベルが言語化される。一方(15b)は恒常的属性になる。カテゴリー( $\beta$ )は(14b)の構造を持つ。A とカテゴリー( $\beta$ )が同一連結され、カテゴリー(A)となる。その個体カテゴリーの中に属性成員(B)があり、個体 A の恒常的属性となる。同時に A と、属性(B)が通常連結され、この 2 つ(A と B)が言語化される。(15a)の例を(16)に、(15b)の例を(17)に示す。

- (15) a. CATEGORY( $\alpha$ )      CATEGORY(属性)      b. CATEGORY( $\alpha$ )      CATEGORY(A)
- 
- 
- (16) a. 今日の海は静かだ。      b. 私は風邪気味だ。      c. 彼の車は汚い。
- (17) a. 地球は丸い。      b. キリンの首は長い。      c. 彼の時計は大きい。

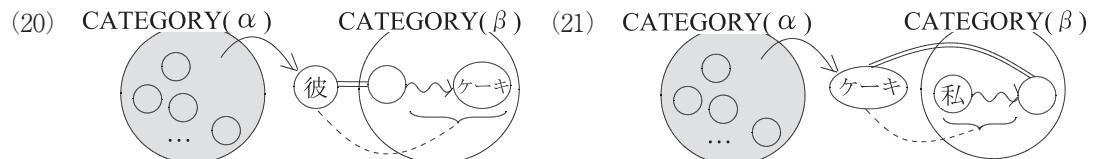
### 3.1.3 動詞表現との連結(ハ)

動詞表現が後続するものを見る。動詞表現の場合、A は連結するものによって、役割、または格が異なる。主格と連結する例が(18)で、目的格と連結する例が(19)になる\*2。

- (18) a. 彼は、ケーキを食べた。      b. 太郎は、ボールを蹴った。

- (19) a. ケーキは、私が食べました。      b. ボールは、太郎が蹴った。

スキーマで表すと、主格(18a)のスキーマは(20)、目的格(19a)のスキーマは(21)になる。A と連結するものが、スキーマ( $\beta$ )でどんな働きをしているかで、A の役割が定まる。



(20)では A[彼]が、カテゴリー( $\beta$ )の主語と同一連結して、主格を表す。同時に動詞と目的語部分とに通常連結し、両者が言語化される。一方(21)では A(ケーキ)が、カテゴリー( $\beta$ )の目的語と同一連結して、目的格を表す。そして A が、主語と動詞部分とに通常連結し、それらが言語化される。目的格と連結する場合、動詞の他動性が問題となる。とりわけ他動性が弱い場合、「は」を「を」に置き換えないものもある。それでも行為の対象である限り、(21)のようなスキーマを持つと考えていく。

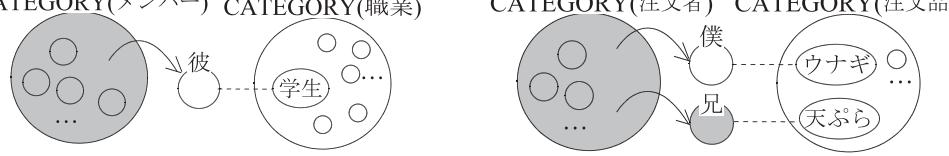
主格や目的格以外の格と連結するものもある。例として(22)がある。この場合、格助詞が残る場合と、ハ单独で置き換わるものに分けられる。(22)は、別の格助詞と共に起している例になる。

- (22) a. 東京には、たくさん人がいます。      b. 神戸までは、快速があります。

- c. インフルエンザでは、3人が欠席しました。 d. 鹿児島からは、学生が入学しました。

### 3.2 対比の用法(ハ)

次に対比の用例を見る。対比では、Aだけが他と違うことを表す。〈他〉との対比の仕方は、2種類ある。一つは、他メンバーを特定せずに対比する場合と、もう一つは他メンバーをリストアップする形で対比する場合である。具体例をもとにスキーマで示すと、(23)になる。

- (23) a. 彼は学生です。 b. 僕はウナギで、兄は天ぷらだ。  


(23a)ではグループの他メンバーと違い、彼が学生であると述べている。つまり学生は、彼だけになる。このときカテゴリー内にとどまる他メンバーは、より強く背景化される。強く背景化することで、[彼]だけが[学生]と連結する(濃い背景色で表現)。一方(23b)は、うなぎ文を並列した表現になる。スキーマは前半部分を表している。複数のものがカテゴリー(注文者)から連続して取り出されるが、対比で述べるときには、当該物(ここでは[僕])以外は、強く背景化され、他者と違い[僕]だけがの意味になる。連続して取り出される度に、当該物以外の他者が強く背景化され、取り出されるものが、交互に前景化される。そして交互に対比される意味となる。

この対比の意味は、助数詞の名詞的用法で[限度等]の意味を持つことがある(cf. 大野 1999: 70)。助数詞の後に、格助詞や副助詞が来て、その後に「は」が付き限度などの意味になる。

- (24) a. お寿司を二つ、六時には持ってきてください。 b. 十日まではだめです。  
 c. 四時からはあいています。 d. 合計しても100万円にはならない。(大野 1999: 71, 72)  
 カテゴリー( $\alpha$ )(助数詞)から取り出した〈特定の数+助数詞〉以外を強く背景化することで、こうした意味になる。

### 3.3 疑問詞とその値(ハ)

疑問詞とその値が現れる位置は、ハ構文とガ構文では異なる。ハ構文では、叙述部分にのみ疑問詞及びその値が現れるが、ガ構文では、ガのところにも、叙述部分にも現れることができる。

まずハ構文から見ていく。ハは、上記で述べたように、カテゴリー( $\alpha$ )から成員の取り出しがおこる。取り出すものは特定しなければ、取り出すことができない。久野(1973: 29)では「聞き手にとって、その指示対象が明らかでないような場合には、話し手はそれを主題として用いることはできない」と述べている。よってハが疑問詞に付くことはない<sup>3</sup>。また疑問詞が入れないとそこには、疑問詞の値も入ることができない。疑問詞の例を(25)、その値の例を(26)に示す。

- (25) a. \*誰は、学生ですか。 b. \*誰は話しているの。 c. \*誰は、ウナギですか。  
 (26) [(25)の返答]a. \*彼は、学生です。 b. \*息子は話している。 c. \*明美は、ウナギです。

疑問詞とその値が現れるのは、(27)(28)のように叙述部分になる。カテゴリー( $\beta$ )には旧情報という制約がないため、疑問詞とその値が現れることが出来る(bはaの質問の返答)。

- (27) a. 彼は誰ですか。 b. 彼は佐藤です。  
 (28) a. 彼は何を見つけたの。 b. 彼は傘を見つけました。

一方ガ構文では、疑問詞とその値をガで承けることができる。カテゴリー( $\alpha$ )が旧情報という

制約がないからである。(29)(30)にその例を示す。ともにaが疑問詞で、bがその値の例になる。

- (29) a. 誰が学生ですか。 b. 彼が学生です。

- (30) a. 誰が話しているの。 b. 彼が話しています。

ガ構文で叙述部分に、疑問詞やその値が現れる場合は、適格な(31)の場合と、不適格な(32)のような例がある(bはaの質問の返答)。この違いは、4.1.1節、4.3節で述べることとする。

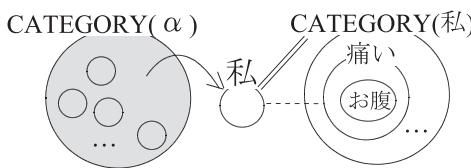
- (31) a. 彼が何を見つけたの。 b. 彼が傘を見つけました。

- (32) a. \*彼が誰ですか。 b. \*彼が佐藤です。

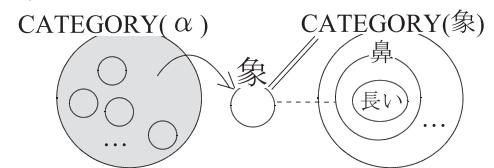
### 3.4 「○は○が…」の構文(ハ)

ハとガが両方現れる「○は○が…」の構文を考察する。ガの部分で、Aの構成要素の一つがどのような状態かを述べる。状態を属性と置き換えると、3.1.2節で見たように、一時的属性か恒常的属性かで2種類ある。一時的属性の例とスキーマを(33a)に、恒常的属性の例とスキーマを(33b)に示す。

- (33) a. 私はお腹が痛いです。



- b. 象は鼻が長いです。



(33a)ではA[私]との同一連結により、カテゴリー( $\beta$ )がカテゴリー(私)となる。その中に、個体成員〈お腹〉が存在する。この〈お腹〉が、属性カテゴリー(痛い)の成員となる。属性の中に、個体成員があるので、一時的属性となる。そしてA[私]と[お腹が痛い]が通常連結し、言語化される。

一方(33b)でも同様に、A[象]との同一連結により、カテゴリー( $\beta$ )がカテゴリー(象)となる。その中に個体成員〈鼻〉がある。〈鼻〉の中の、属性〈長い〉に焦点があたり前景化される。個体〈鼻〉の中に、属性〈長い〉があるため、恒常的属性になる。そしてA[象]と[鼻が長い]が通常連結され、言語化される。形態は同じでも、一時的／恒常的の意味の違いで、スキーマも違うものとなる。

### 3.5 複文における(ハ)

ハは従属節(および連体修飾節)の中では、基本的には、ハはガに置き換えられる。

- (34) 明日雨が降ったら、運動会は中止です。 b. 辻井さんが演奏すると、皆が感動する。

しかし対比の意味であったり、従属度が低い(すなわち独立性が高い)場合、ハを用いることができる。宮島・仁田(1995: 281)には、ガのみの節として、条件節(～タラ、～バ、～トなど)、時間節(～マエ、～マデ、～トキなど)、連体修飾節、埋め込み節(～ノ、～コト、～ヨウニなど)が上げられており、ハもガも使える節として、引用節(～ト)、接続節(～ケレド、～ガなど)、理由節(～カラ、～ノデ、～ノニなど)が上げられている。両方使えて、ガまたはハが優先されることが多い。

ここではハには制約が存在すると考える。ハでは、独立した区切りの最後まで、主題が維持されることが保証されなければならない。逆を言うと、区切りが保証されれば、単文と同じ扱いになり、ハを使うことができる。区切りの最後が見えなければ、ガに置き換えられる。そのため従

属度が高い場合であっても、従属節と主節の主語が同じなど、区切り(主節の最後)が明確になれば、ハが使える。

(35) 彼の絵は素晴らしいから、すぐに売れてしまう。

また対比の意味や提示語は独立しており、ハが用いられる。(36)が対比、(37)が提示語の例になる。

(36) (大型車は通れないが)小型車は通れる橋

(森田 1995: 79)

(37) 梅雨(が／は)なぜ起こるか、これはもう皆さんご承知のことだと思います。 (森田 1995: 79)

## 4. ガのイメージスキーマと用法

ガの用法について見ていく。ここでもハと同じように、まずAに後続するもので分類し述べる。一つめは名詞、二つめは形容詞・形容動詞、三つめは動詞表現が後続する場合になる。そして排他的用法や疑問詞などについて論じていく。ガは格助詞で、付加するものの格を表す。主格となることが多いが、必ずしもそれに限定されないことも見る。

### 4.1 連結するもの(ガ)

#### 4.1.1 名詞との連結(ガ)

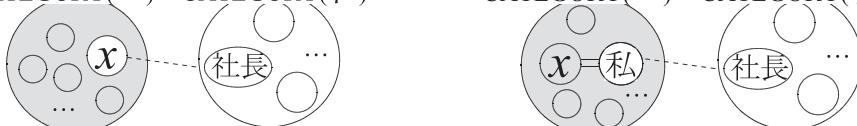
ガに、名詞が後続する場合、ほとんどの場合が、総記の意味になる。総記では、「ガで承けるAだけが」の解釈を持つ。久野(1973: 32)が指摘するように、質問などの文脈がない状態で、(38b)(39b)を発話すると、極めて座りが悪い。そのため「今問題にしている事物の中で」、Aが何々なのだという文脈が必要となる。例えば(38a)(39a)のように、Aを尋ねる文脈が必要となる。

(38) a. 誰が社長ですか。 b. 私が社長です。

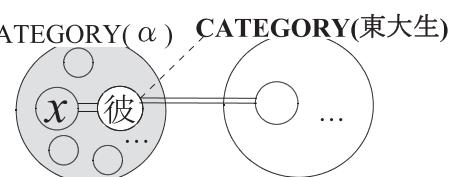
(39) a. 誰が東大生ですか。 b. 彼が東大生です。

(38)(39)は、異なるスキーマになる。(38)は(40)に示すように、通常連結を基本とする。(38a)の質問のスキーマは、(40a)になる。疑問詞が $x$ で表記されており、その $x$ が、カテゴリー( $\beta$ )の成員〈社長〉と通常連結する。返答(38b)のスキーマは、(40b)になる。カテゴリー( $\alpha$ )の $x$ が[私]と同一連結し、カテゴリー( $\beta$ )の成員〈社長〉と通常連結する。

(40) a. CATEGORY( $\alpha$ ) CATEGORY( $\beta$ )      b. CATEGORY( $\alpha$ ) CATEGORY( $\beta$ )



一方(39b)では、あるグループに所属するという意味になる。スキーマは(41)になる。(41)では[彼]が、カテゴリー(東大生)の成員と同一連結し、[彼]が[東大生]の一員であることを示している。[彼]とカテゴリー(東大生)が通常連結し、両方が言語化される。ただし(39b)であっても、カテゴリー( $\beta$ )の設定によっては、(40b)のスキーマをとる可能性もある。どちらのスキーマになるかは、連結する対象を単体とみる(41)か、複合体とみるかの違いになる。単体とみれば(40b)になり、複合体とみれば(41)となる。話し手の意識の違いで、表現は同じでもスキーマは異なる。



名詞が後続するガ構文では、叙述部分に、疑問詞及びその値が現れない。

- (42) a. \*この商品が、何ですか。 b. \*この商品が、新製品です。 (b. 「新製品」が値の解釈)

- (43) a. \*彼が、誰ですか。 b. \*彼が、花子の父親です。 (b. 「花子の父親」が値の解釈) (cf. (32))

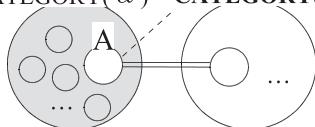
しかしガ構文が動詞文であれば、その目的語は、疑問詞やその値になれる。そのため叙述部分に疑問詞及びその値がこれない訳ではない。名詞が後続するガ構文で、叙述部分に疑問詞とその値が現れないのは、ハ構文との棲み分けと考えられる。倒置指定文「A は B だ」と、指定文「B が A (だ)」は同義と言われる。指定文のガは、中立叙述のガとは異なる意味を持つ。中立叙述でない場合、(42)(43)に示すように、疑問詞やその値が、叙述部分に来ることはなく、不適格になる(cf. 西山 2003: 134)。

なお総記の意味では、該当するものはすべて列挙する必要がある。(39b)だと東大生は、太郎だけの意味になる。太郎と花子が東大生なら、太郎と花子が東大生です、としなければならない。

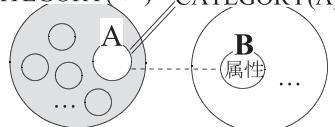
#### 4.1.2 形容詞・形容動詞との連結(ガ)

形容詞・形容動詞と連結する場合も、ハと同様、2種類ある。一時的属性と、恒常的属性である。スキーマで示すと、(44)になる。一時的属性(44a)では、属性カテゴリーの中に、個体成員があり、それと A が同一連結する。属性の中に個体成員があるので、一時的属性になる。通常連結する A とカテゴリー・ラベルが、言語化される。一方恒常的属性(44b)では、A と同一連結された個体カテゴリー(A)の中に、属性成員が存在する。個体の中に、属性があることから、恒常的属性になる。A と属性成員 B が通常連結され、この2つが言語化される。

- (44) a. CATEGORY( $\alpha$ ) CATEGORY(属性)



- b. CATEGORY( $\alpha$ ) CATEGORY(A)



(44)の2つは、解釈が異なる。一時的属性(44a)の場合、基本中立叙述を表す(cf. 久野 1973: 32)。

- (45) a. 空ガ青イネ。 b. 大変ダ、太郎ガ病気ダ。 (久野 1973: 32)

ただ疑問詞による質問の答としての場合、総記の意味にもなりうる。そのため二義的と言える。

一方恒常的属性(44b)の場合、総記の解釈となる(cf. 久野 1973: 32)。恒常的な属性は、中立叙述とはなり得ず、総記の解釈になっている。これは4.1.1節で述べた名詞との連結での主張とも一致する。

- (46) a. 何の動物が、鼻が長いですか。象が鼻が長いです。

- b. どの都市が、日本で一番人口が多いですか。東京が一番人口が多いです。

ここで他動性について考えたい。形容詞・形容動詞であっても、対象物と見なせるものに、ガが付く場合がある。ガは「ヲ」と置き換えが可能なものもある。通例は「ヲ」を取るのは、動詞が多いが、形容詞・形容動詞でも「ヲ」が使われることがある。久野(1973: 50)は、形容詞、形容動詞の用例として2つ上げている。[能力](上手、苦手、下手、得意、ウマイ)と、[内部感情](好キ、嫌イ、欲シイ、コワイ)である。ヲに置き換えられないものもあるが、[能力]や[内部感情]が向かう対象と見なせる点では共通している。各々例を示す(例は久野 1973: 50)。

- (47) [能力] a. 誰ガ英語ガ上手デスカ。

- b. 僕ガ日本語ガ苦手／下手ナコトハ皆ヨク知ッテイマス。

- (48) [内部感情] a. 僕ハ花子ガコワイ。

- b. 太郎ガ花子ガ好キ／嫌イナコトハヨク知ッテイマス。

(47)は(44a)のスキーマになる。(44a)で[属性]の代わりに[英語が上手]がカテゴリーとなり、その成員と[誰]が同一連結する。(48a)も同様に(44a)になるが、(48b)はスキーマが異なる。花子は対象としての度合いがより高い。花子を好きなグループの一員というより、もっと対象として見ているため、より動詞的と言える。このときは後述する(56b)のスキーマとして見なされる。

なおガとヲが両方現れる場合、ガが対象に焦点があたり、ヲは行為に焦点があたる。この違いはスキーマから来る。ガでは、始めにカテゴリー( $\alpha$ )のAに焦点をあてて、カテゴリー( $\beta$ )にある目的語と同一連結する。一方ヲでは、カテゴリー( $\beta$ )だけしかなく、行為に焦点があたる。行為のスキーマは次節で見ることとする。

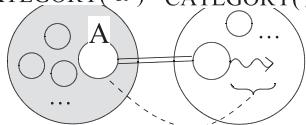
#### 4.1.3 動詞表現との連結(ガ)

ガに動詞表現が後続する場合、2つ視点が必要である。一つはガが何の格を表しているのか、もう一つは中立叙述または総記のどちらの解釈なのかの視点である。まず一つめの格では、(49)(50)のように主格を表すことが多い。自動詞の例が(49)、スキーマは(51a)になる。他動詞は、例が(50)で、スキーマは(51b)になる。どちらもAは、カテゴリー( $\beta$ )の主語と同一連結している(二重線)。同時にAは、主語以外の部分と、通常連結し、言語化される。

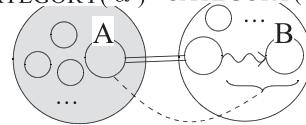
- (49) a. 雪が降っている。 b. 太郎が走っている。 c. 花子が笑った。

- (50) a. 彼がボールを蹴っている。 b. 学生が本を読んでいる。 c. この生徒が落書きを書いた。

- (51) a. CATEGORY( $\alpha$ ) CATEGORY( $\beta$ )



- b. CATEGORY( $\alpha$ ) CATEGORY( $\beta$ )



また主格でなく、行為の対象である目的格を表すこともある。久野(1973: 50)では、形容詞、形容動詞で見たように、「ヲ」の代わりに「ガ」が使われる動詞での用例を上げている。列挙すると、[可能](例は(52)：デキル、レル／ラレル)、[自意思によらない感覚](例は(53)：解ル、聞コエル、見エル)、[所有・必要](例は(54)：アル、要ル)である。これに「動詞+タイ(助動詞)」(例は(55))の表現がある<sup>\*4</sup>。各々例を示す(例はすべて久野 1973: 50)。

- (52) a. 誰ガ日本語(ヲ話スコト)ガデキルカ。 b. 誰が日本語ガ／ヲ話セルカ。

- (53) a. アナタハ日本語ガ解リマスカ。 b. アナタガ黒板ノ字ガ見エナイノハ当然デス。

- (54) a. アナタガ金ガアル／ガナイコトハ皆が知ッテイル。 b. 私ハオ金ガ要ル。

- (55) a. 僕ハ映画ガ／ヲ見タイ。 b. 誰ガオスシガ／ヲ食べタイノデスカ。

ここで用いられる動詞は、概して他動性が弱いが、それでも程度差がある。ヲに置き換えられるものは他動性が強く、置き換えられないものは他動性が弱い。スキーマは(56)になる。他動性が弱いものは(56a)、強いものは(56b)になる。(56a)は(44a)と平行的である。一方(56b)はAが、カテゴリー( $\beta$ )の目的語と同一連結されており、他動性が維持され、通常連結部分が言語化される。

- (56) a. CATEGORY( $\alpha$ )    CATEGORY( $\beta$ )  


b. CATEGORY( $\alpha$ )    CATEGORY( $\beta$ )  


しかしあくまで他動性が弱い中での程度差であって、他動性が強い目的格には、ヲの代わりに、ガをつけることはできない(例は(57))。

- (57) a. \*ボールが蹴った(cf. ボールを蹴った) b. \*本が読んだ(cf. 本を読んだ)

次にガとニが置き換わる場所格の例を考える。(58a)では、場所を表すニの代わりに、ガが用いられている。(58)の2つはスキーマが異なる。(58a)は(59a)、(58b)は(59b)になる。

- (58) a. ニューヨークガ高層建築ガアル。 b. ニューヨークニ高層建築ガアル。(久野 1973: 51)

- (59) a. CATEGORY(場所) //CATEGORY(NY) b. CATEGORY(NY)



(59a)ではカテゴリー(場所)でのNY以外の他成員が強く背景化され、NY以外を排他した表現となっている(濃く背景化)。一方(59b)ではそうした排他などなく、単に包含関係を述べているに過ぎない。つまり構造の一部が共有されているだけでスキーマ全体としては異なるものになっている。

それ以外の意味の格助詞と、ガが置き換わることは基本ない。例を(60)に示す。

- (60) \* 6時までが、できるようにしてください。(cf. 6時までに、)

2つめの視点が解釈の問題で、中立叙述か総記かになる。中立叙述とは、現象を写し出すように描写する表現になる。中立叙述は、行為、存在、一時的状態を表す動詞で起こる(cf. 久野 1973: 32)。この意味はハにはない。ハは題目として取り上げ、題目について述べる表現である。中立叙述という直裁的表現とは、相容れないものである。例として、(61)のようなものがある。久野(1973: 33)で指摘しているように、総記の意味と二義的になることもある。

- (61) a. 雨ガ降ッテイル。b. 机ノ上ニ本ガアル。c. 大変ダ、太郎ガ病気ダ。 (久野 1973: 32)

一方4.1.2節で述べたように、恒常的状態、習慣的動作では総記になる。このとき中立叙述の意味はない。(cf. 久野 1973: 32)

- (62) a. 誰ガ日本語ヲ知ッテイルカ。太郎ガ日本語ヲ知ッテイル。

- b. 何ガ人間ノ先祖デスカ。猿ガ人間ノ先祖デス。

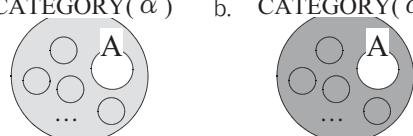
(久野 1973: 32)

## 4.2 排他の用法(ガ)

ハではカテゴリー( $\alpha$ )から A を取り出すため、カテゴリー( $\alpha$ )と A が切り離された形となり、対比の意味が生じた。ガではスキーマから分かるように、カテゴリー( $\alpha$ )の中に成員としてとどまっており、一体化している。そのため他成員を背景化することで、排他的意味が生じる。

この排他的意味は中立叙述の時が弱く、総記の意味では強い。しかし A を強調することで、排他的意味をより強くすることができ (63) a CATEGORY( $\alpha$ ) b CATEGORY( $\alpha$ )

る。これはすべての用法において言えるが、背景化を強くすることで強い排他的意味が生じる。これを(63b)のよ

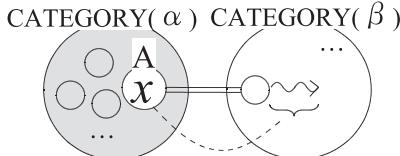


うに、濃い背景化で示すこととする<sup>5</sup>。

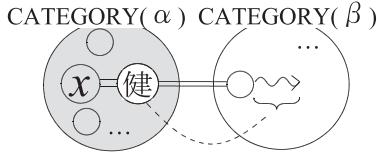
#### 4.3 疑問詞とその値(ガ)

ハと同様に、ガでも疑問詞とその解が生じる。名詞が後続する場合の疑問詞とその値については、4.1.1節で見た。ここでは動詞が後続するものを見ていく。まずは自動詞の場合、(64a)に疑問詞の例とスキーマ、(64b)にその解となる例とスキーマをあげる。どちらもAが自動詞の主語と同一連結し、主語以外の部分と通常連結する。そして通常連結部分が、言語化される。

- (64) a. 誰が、走っているのですか。

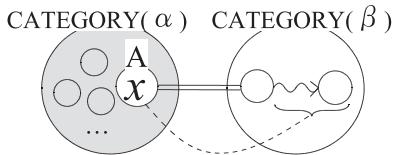


- b. 健が走っています。

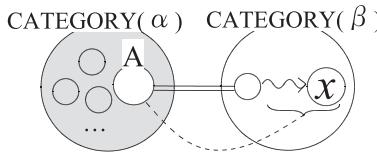


一方他動詞の場合、疑問詞は主語に現れる(65a)と、目的語に現れる(65b)がある。これに対応して、同じ位置に疑問詞の解が現れることができる。疑問詞(65a)に対して、その解が(66a)になる。同様に疑問詞(65b)に対して、その解が(66b)になる。

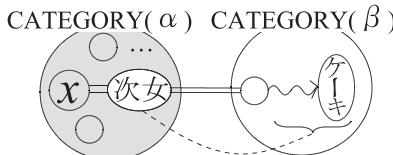
- (65) a. 誰がケーキを食べましたか。



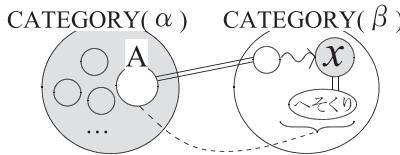
- b. 彼が何を見つけましたか。



- (66) a. 次女がケーキを食べました。



- b. 彼がへそくりを見つけました。



(65)(66)ではどちらも、カテゴリー(α)のAが、カテゴリー(β)の主語と、同一連結する。そしてAは主語以外の部分と通常連結し、言語化される。つまり他動詞用法では、Aは主語のみと同一連結する。よって(56b)のように目的語と連結する用法は不適格となる。不適格な例を(67)に示す。

- (67) a. \*何が、次女が食べたかったの。 b. \*何が、彼が見つけたの。

## 5.まとめ

本稿は、助詞ハとガを考察し、その用法及び意味をカテゴリースキーマで示した。ここでは2つのカテゴリーを置き、両者の関係で用法の意味を表した。一つめのカテゴリー(α)にある成員Aをハとガが承けるが、違いは、ハではAがカテゴリーの外に取り出され、ガではカテゴリーの中にとどまるとした。そしてどちらも他成員が背景化されるが、背景化の度合いが表現によって異なるとした。二つめのカテゴリー(β)は、名詞、形容詞・形容動詞、動詞表現が現れるかで分け、スキーマで意味を示した。そして疑問詞とその値の現れる位置と意味などについて考察した。Aとカテゴリー(β)の関係づけは、連結によって示した。連結には通常連結と同一連結があ

り、Aとカテゴリー・ラベルや成員が連結するとした。

ハとガを考察するにあたり、人称による適格性の違いについて、構文によるハとガの傾向の違いについてなど残された課題も多い。また無助詞も含めて、ハとガを考察することは、統一的な観点を持つ観点から重要と考える。今後の課題としたい。

## 注

\*1 「ハ」「ガ」無助詞の3つが分析されることもあるが、本稿では「ハ」「ガ」の分析のみを扱う。

\*2 (19)のスキーマは、厳密にはガが現れていることから、〈私〉はサブカテゴリー内で選ばれた成員であり、別カテゴリーとさらに連結することになるが、ここでは簡略化したもので表記する。

\*3 旧情報からの取り出しなので、そもそも疑問詞であること自体、おかしいとも言える。

\*4 久野(1973: 55)が(i)(ii)から指摘するように、完全に口語化されていない漢語系の動詞のタイ、レル／ラレル形は、ガを取りにくい。適格性が、由来によって左右されることがある。

(i) {本箱／書架} ガ／ヲ買イタイ。 (ii) ? {本箱／書架} ガ／ヲ購入シタイ。

\*5 野田(1996: 200-218; 231-233)にあるガの「強い排他」と「弱い排他」ひいては、ハの「明示的な対比」と「暗示的な対比」にも通じるところになる。

## 参考文献

- Elsherbeny, Maher. (1996) 「「ハ」と「ガ」」『ニダバ』(25), 38-47.
- 庵功雄他 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 上林洋二 (1988) 「措定文と指定文－ハとガの一面」『文芸言語研究 言語篇』(14), 57-74.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 三上章 (1953) 「ハとガの使分け」『語文』(8), 20-27.
- (1974) 『日本語の論理：ハとガ』くろしお出版.
- 森田良行 (1995) 『日本語文法の発想』くろしお出版.
- 宮島達夫, 仁田義雄編 (1995) 『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- 野田尚史 (1996) 「「は」と「が」」くろしお出版.
- 益岡隆志, 野田尚史, 沼田善子編 (1995) 『日本語の主題と取り立て』くろしお出版.
- ペトロヴァ・ユリア (2011) 「「ハ」と「ガ」の使い分けの問題について：ロシア語母語話者の場合」『新潟大学国際センター紀要』(7), 86-103.
- 大野晋 (1999) 『日本語練習帳』岩波書店.
- 坂野信彦 (1982) 「ハとガの本義と使い分け－〈前提〉と〈着眼〉－」『中京大学教養論叢』23(3), 570-556.
- 新里勝彦 (1990) 「「ハ」と「ガ」の性格」『沖縄国際大学文学部紀要 英語英文学篇』(12), 25-50.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)